

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 9 月 17 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏名	松島 慶

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
愛知県犬山市 日本モンキーセンター
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
動物園・博物館実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 7 月 14 日 ~ 平成 26 年 7 月 17 日 (4日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
日本モンキーセンター
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
[概要] 博物館としての動物園の役割、動物園における研究者(キュレーター)の役割を学ぶために、実際に動物園においてその仕事の体験を行った。実習は、日本唯一の博物館認定を持つ動物園である日本モンキーセンター(JMC)にて行った。 実習は園長であるPWSの伊谷先生からサル学の歴史を聞いた後、キュレーターの方々から動物園・博物館の役割についてのお話を聞き、実習をそれぞれ行った。実習は飼育実習、標本実習、エンリッチメント実習、展示実習、出張授業の見学など内容は多岐に渡った。
[内容] ・飼育実習 ゴリラとマンドリルの展示室へのエサ設置と、マンドリルの寝室の掃除を行った。 エサ設置の際は、マンドリルは頭数が多いのでばら撒く形でエサ設置を行ったが、ゴリラはエンリッチメントを優先させ、エサの設置場所をランダムに、隠すような形でエサ設置を行った。ゴリラは展示室に入ると、エサがいろんなところにあることをわかっているのか、すぐに展示室中をうろうろし始め、あっという間に全てのエサを見つけ食べてしまった。 マンドリルはフンを地面に擦り付けるという(面倒な)習性があるらしく、掃除の際はデッキブラシを使ってかなりの力をこめてこすらなければ床をきれいにすることはできなかった。実習メンバー4人で行ってもかなりの体力を消費したが、これを毎週、さらに他の部屋も行っている飼育員の方々は大変だと思った。 ・標本実習 標本作成にはいくつかのステップがある。まず死亡した個体の解剖を行い、各器官のサイズや重さを測定・記録する。この内臓部分はホルマリン漬けにして標本とするが、ホルマリンは2回の交換を経てから実際に保存する標本としている。骨部分もちろん標本化するが、骨には肉や脂肪がついているため、さまざまな方法で骨のみにしている。話によると、水に漬けて放置し腐せたり、土に埋めて分解されるのを待たしているという。骨だけになったものは十分に乾燥させ、部位ごとに袋に入れ、箱につめる。これら標本はJMC創業の1956年以来死亡した飼育個体のほぼ全ての個体分があり、博物館としてのJMCを支えるものとなっている。 実習では解剖の見学、ホルマリンの交換、骨の分類とパッキングを行った。一個体に対して大変な時間が割かれており、倉庫中の大量の標本が同じだけ行われてきたと思うと気が遠くなりそうであった。 ・エンリッチメント実習 エンリッチメントは現在世界中の研究者が注目している話題であり、動物園はその対応が求められている。JMCの飼育職員は京大の機関である熊本サンクチュアリへ訪問するなどして、エンリッチメント教育がなされている。 今回の実習では、給餌時のエンリッチメントとして、竹や消防ホースを利用してフィーダーを作成し、実際に使用する場面を観察した。マカク数種に対してフィーダーを作成し、実習生それぞれが別種に対して使用した。私はボンネットモンキーに対してフィーダーを作成したが、興味は持ってもらえたものの、装置を開けることができなかった。(他の種はフィーダーからエサを取り出し採餌に成功していた) ・展示実習 動物園が、動物園ごとに個性があるのは、展示してある(種類)で決まらず、その展示方法にも大きく関わると

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

ころがある。せっかく珍しい生物を展示していたとしても注目してもらえないともったいないというのはもちろん、展示法によってはそう珍しくない動物たちの意外な一面に注目してもらうことができる。

実習では、園内にいるお客さんの会話を聞き、展示に対してどういった印象をもっているのかを調査した。残念なことに、調査日当日は天候があまり優れず、お客さんの数が少なく、十分な調査を行うことができなかった。しかし、印象としては、園内にいくつも展示してある、その動物の解説を主に行っているパネルに目を向けるお客さんが非常に少ないようだった。最後に、パネルをいかに読んでもらうかというディスカッションを行ったが、文字の大きさやアイキャッチの不足が問題点として挙げられた。こういったことは自分がポスターを作製する際にも活用できそうである。

・出張授業見学

JMCは、周囲の小中学校が校外学習に用いられることがしばしばあるが、逆に出張授業を行うこともある。独立した内容の授業を行うこともあるが、今回見学した授業は、校外学習に向けて、よりよい学習のために、サルについて（もしくはヒトについて）前もって知っておくためのものだった。具体的には、ヒトとチンパンジーの骨格標本を用いて、違いとその理由について考えるという授業であった。時間が少し足りないように感じたが、生徒たちに自主的に考えてもらうことを主体としたいい授業であったように思う。

こういった授業のために実際に授業で使っているさまざまな科目の教科書を読み、この学年の生徒がどんな授業を受け、どんなことを知っているか、そこからどのようにサル（動物一般）について興味を広げられるかということを考える実習も行った。小中学生の理科の授業は非常に広い内容を扱っているが、そこからいかに動物への興味を引き伸ばしていけるかということを、動物を研究していく身としては考えていかなければいけないと感じた。

[感想]

今回の実習では、動物園のあまり表に出ないような仕事を中心に活動させてもらった。より動物園の重要性を感じたとともに、動物を研究する者が、一般の人たちにいかに動物のことを伝えていくべきかといったことを考えるよい機会となった。



左：キュレーターの方々によるレクチャー
右：数え切れないほどの標本が眠る標本庫



左・中：フィーダー作り
右：中学生に向けた出張授業

6. その他（特記事項など）